

〔研究ノート〕

介護支援専門員更新研修3ヶ月後 自己評価から見た変化

檜 木 博 之¹⁾

Changes on Self-Assessment Conducted Three Months after Training
Session for Renewal of Effective Period of Long Term Care Support
Specialist Certification

NARAKI Hiroyuki

抄 録

本論は、介護支援専門員更新研修3ヶ月後自己評価を分析し、研修がその後の実践に活かされているか確認するとともに、効果を測ることをねらいとしている。A県において2015年度に実施した介護支援専門員更新研修B1・B2受講者151名を対象に、「対人個別援助技術（講義・演習）」の課目について3ヶ月後自己評価を実施した。受講前と3ヶ月後の自己評価の数値を比較、その変化を明らかにした。また、自由記述の欄に記載された文章についてテキストマイニングを行い出現頻度の多い単語を抽出、共起ネットワークを活用し分析を行った。

研修修了3ヶ月後の自己評価の結果をまとめると、以下の3点が考察された。①研修内容と日々の実践を振り返る機会になっている。②研修が実践に変化を与えている。③研修内容と実践を比較して内省した評価に繋がっている。これらから3ヶ月後自己評価では介護支援専門員更新研修がその後の実践に対する自己評価に影響していることが明らかになった。

キーワード：介護支援専門員

更新研修

自己評価

研修効果

テキストマイニング

1) 身延山大学 仏教学部 福祉学科

1 はじめに

2000年の介護保険法施行から制度の中に位置づけられた介護支援専門員は、これまで絶えず専門職としての質が問われてきた。「本来のケアマネジメント機能は家族が行っている」¹⁾「介護保険制度のなかのサービスを調整することだけが仕事になっている感が否めない」²⁾等、介護支援専門員のケアマネジメントの質への指摘が多くあった。そのため介護支援専門員の質の向上を図ることを目的に、2006年には介護支援専門員の資格更新制を導入することになった。介護支援専門員として業務を続けていくためには、5年間で介護支援専門員更新研修を修了しなければならなくなった。しかし、5年に一度受講するだけの更新研修では、介護支援専門員の質の課題が解消されるわけではなく、更に独居高齢者や認知症の方の増加、医療との連携が必要な利用者の増加等、専門職としての質が益々問われる状況になってきている。

このような背景から、2013年に「介護支援専門員（ケアマネジャー）の資質向上と今後のあり方に関する検討会における議論の中間的な整理」が出され、「研修の実施方法について、より実践的な研修となるよう演習にも重点を置くとともに、研修内容が理解されているかどうかを確認するため、研修修了時の修了評価の実施についても検討すべきである」³⁾と更新研修カリキュラムや評価等の見直しを行う必要性が示された。そして、2016年度から介護支援専門員更新研修は新しいカリキュラムのもとで行われることになり、大幅な研修内容の見直しが行われるようになった。その中で研修を受講するだけでなく、研修修了後の評価も求められるようになってきている。

このような背景の中、A県では今後、研修修了後の評価が重要になることを踏まえて、2015年度の介護支援専門員研修において、一部の課目で研修を終了した3ヶ月後の自己評価を行った。本論では、A県で行った介護支援専門員更新研修の3ヶ月後自己評価の結果をまとめ、研修効果を検証すると共に、今後の評価の在り方を検討することをねらいとしている。

2 研究概要

研究目的は、介護支援専門員更新研修3ヶ月後自己評価を行うことで、研修がその後の実践に活かされているか確認するとともに、研修の効果を図ることとしている。また、2016年度以降の新しい研修体制において、今後どのような研修評価を行っていくほうがよいのか、その在り方も検討していく。

研究方法は、A県において2015年度に実施した介護支援専門員更新研修B1・B2受講者151名を対象に、「対人個別援助技術（講義・演習）」の課目について研修3ヶ月後実践評価を実施した。評価票は、介護支援専門員研修実施要綱に基づき日本介護支援専門員協会が作成したものを使用した。評価表は項目ごとに「4、できる」「3、できる場合が多い」「2、できない場合が多い」「1、できない」として、受講前と3ヶ月後にそれぞれ自己評価として数値を記載した。この受講前と3ヶ月後の自己評価の数値を比

較し、数値が高くなった場合は「上昇」、低くなった場合は「下降」、同じだった場合は「変化なし」に分けてそれぞれの割合を明らかにした。また、自由記述の欄に記載された文章についてテキストマイニングを行い出現頻度の多い単語を抽出、共起ネットワークを活用し分析を行った。テキストマイニングは、KH Corderを使用した。

本研究の倫理的配慮として、研修実施前に研修3ヶ月後の実践評価票を研究でも使用することを説明し、回答を得た。また、調査結果をまとめるに当たり個人が特定されることがないように配慮した。

3 研究結果

質問①「ケアマネジメント・プロセスの段階に応じて面接技術を使うことができる」

自己評価が受講前と3ヶ月後の自己評価を比較（表①-1）し、「上昇」111人（73.5%）、「下降」0人（0%）、「変化なし」37人（24.5%）、「評価未記入」3人（2.0%）という結果であった。7割以上が受講前より3ヶ月後のほうが「できる」ようになっていと自己評価していた。

自由記述の頻出単語（表①-2 表①-3）では、「上昇」が「面接」「技術」「意識」「目的」「段階」等、「変化なし」が「面接」「意識」「技術」「初回」「アセスメント」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図（図1）では、「上昇」「変化なし」の両方での頻出単語として「面接」「技術」「意識」等の単語が挙げられた。KWIC コンコーダンスにて「面接」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「面接技術を活用する」「面接技術があまりできていない」等「面接技術」という単語で頻出していた。また「意識して面接するようになった」「場面に応じ面接できるよう意識

表①-1 質問① 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	111人	73.5%
下降	0人	0%
変化なし	37人	24.5%
未記入	3人	2.0%

表①-2 自由記述頻出単語（上昇）

頻出単語	出現回数
面接	41回
技術	19回
意識	18回
目的	12回
段階	12回

表①-3 自由記述頻出単語（変化なし）

頻出単語	出現回数
面接	20回
意識	8回
技術	5回
初回	4回
アセスメント	3回

質問③ 「導入から終結まで、適切に面接の組立てができる」

自己評価の比較（表③-1）では、「上昇」103人（68.2%）、「下降」1人（0.7%）、「変化なし」44人（29.1%）、「評価未記入」3人（2.0%）という結果であった。面接の組立てについても、7割近くの者が受講前より上昇したと評価していた。

自由記述の頻出単語（表③-2 表③-3）では、「上昇」が「面接」「目的」「組立て」

表②-1 質問② 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	102人	67.5%
下降	1人	0.7%
変化なし	45人	29.8%
未記入	3人	2.0%

表②-2 自由記述頻出単語（上昇）

頻出単語	出現回数
利用	30回
面接	20回
合わせる	20回
技術	14回
思う	11回

表②-3 自由記述頻出単語（変化なし）

頻出単語	出現回数
面接	12回
利用	9回
技術	8回
家族	6回
大切	6回

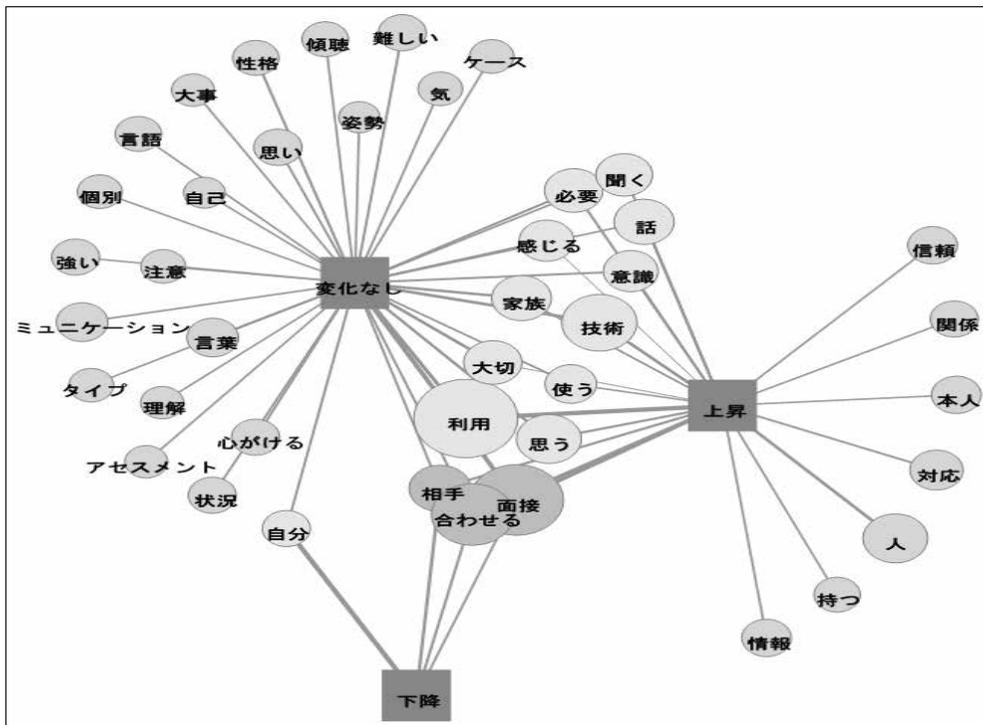


図2 質問② 共起ネットワーク図

「意識」「準備」等、「変化なし」が「面接」「思う」「行う」「意識」「導入」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図(図3)では、「上昇」「下降」「変化なし」の3つにおける頻出単語として「面接」が挙げられた。KWIC コードダンスにて「面接」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「面接の目的を意識したい」「面接するためには事前に準備する」「しっかり準備して面接を行っていると思う」「目的意識を持って面接できるよう意識している」等の記載があった。

表③-1 質問③ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	103人	68.2%
下降	1人	0.7%
変化なし	44人	29.1%
未記入	3人	2.0%

表③-2 自由記述頻出単語(上昇)

頻出単語	出現回数
面接	39回
目的	16回
組立て	14回
意識	13回
準備	12回

表③-3 自由記述頻出単語(変化なし)

頻出単語	出現回数
面接	13回
思う	6回
行う	6回
意識	5回
導入	4回

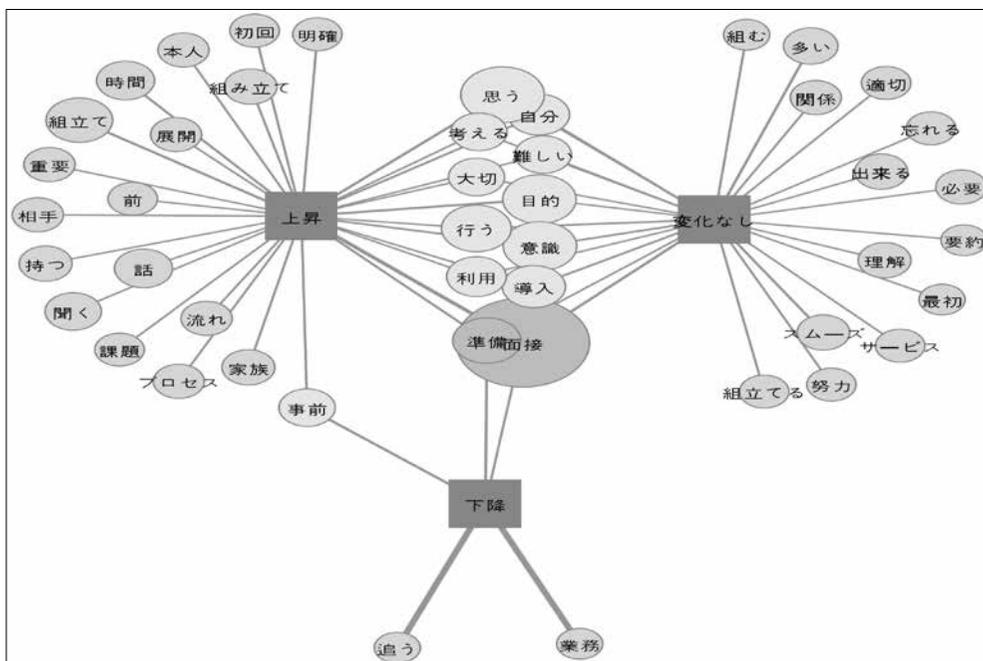


図3 質問③ 共起ネットワーク図

質問④「利用者が直面している問題に焦点を当てた面接ができる」

自己評価（表④-1）の比較が「上昇」94人（62.3%）、「下降」1人（0.7%）、「変化なし」53人（35.1%）、「評価未記入」3人（2.0%）であった。「問題に焦点をあてた面接」についてはこれまでよりも若干減少し、約6割の者が3ヶ月後自己評価が上昇すると回答していた。

自由記述の頻出単語（表④-2、表④-3）では、「上昇」が「問題」「利用」「面接」「焦点」「聞く」等、「変化なし」が「問題」「面接」「利用」「思う」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図（図4）では、「上昇」「下降」「変化なし」の3つの中での頻出単語として「問題」が挙げられた。また、「上昇」「変化なし」の両方で「面接」が頻出単語として挙げられた。

KWIC コンコーダンスにて「問題」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「利用者の抱える問題、強さに気づけたらいいと思う」「利用者の抱える問題について整理してから行うようにしている」「利用者の問題がわかる面接をしていきたいと思う」等の記載があった。また、「面接」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「双方向の面接を意識する」「面接中も意識して行う」「思いの表出の中に課題があることにも注意して面接していくことが大切」等の記載があった。

「変化なし」の回答をした者の自由記述について、KWIC コンコーダンスにて「問題」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると「問題点に焦点を当てるようにしたい」「問題点を明確にしていく」「問題点に焦点を当てすぎ、しつこいと思われることが多い」等の記載があった。「面接」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「掘り下げて面接できることもあるが、できないこともある」「利用者の本心を汲み取って、面接するようにしたい」「どういうことに困っていて支援を必要としているのか考えながら面接を行っていこうと思う」等の記載があった。

表④-1 質問④ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	94人	62.3%
下降	1人	0.7%
変化なし	53人	35.1%
未記入	3人	2.0%

表④-2 自由記述頻出単語（上昇）

頻出単語	出現回数
問題	34回
利用	25回
面接	17回
焦点	10回
聞く	9回

表④-3 自由記述頻出単語（変化なし）

頻出単語	出現回数
問題	17回
面接	15回
利用	9回
思う	8回

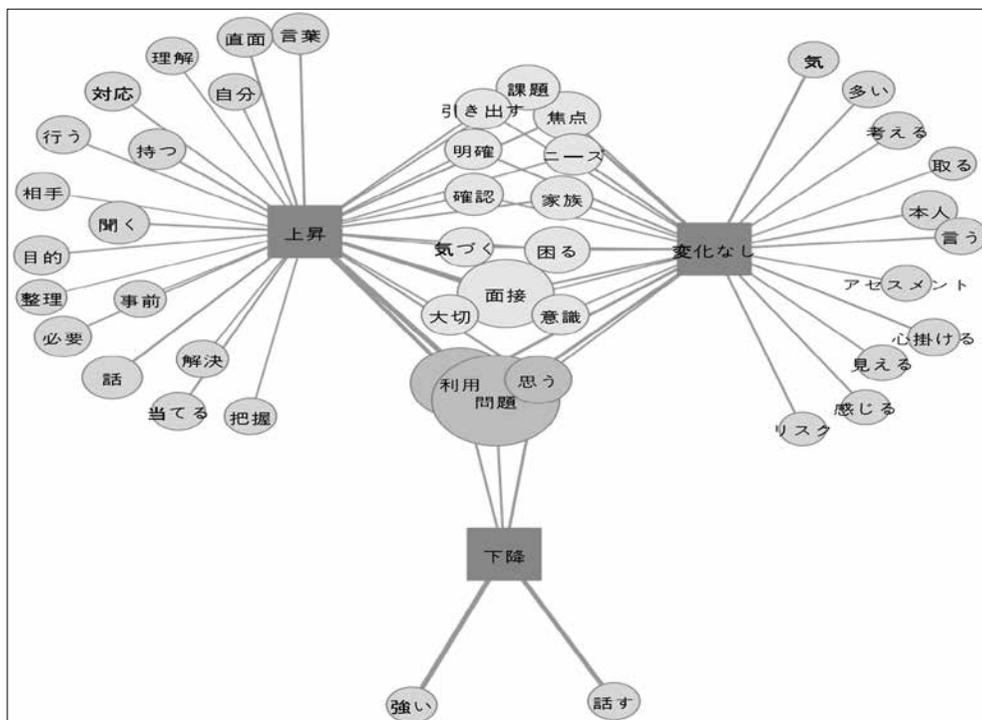


図4 質問④ 共起ネットワーク図

質問⑤ 「強さ（利用者が持っている強さ、利用者を取り巻く環境の強さ）に焦点を当てた面接ができる」

自己評価の比較（表⑤-1）が「上昇」108人（71.5%）、「下降」1人（0.7%）、「変化なし」39人（25.8%）、「評価未記入」3人（2.0%）であった。「強さに焦点をあてた面接」については、3ヶ月後自己評価が「上昇」7割以上で「問題に焦点をあてた面接」より上回っていた。

自由記述の頻出単語（表⑤-2、表⑤-3）では、「上昇」が「強い」「利用」「焦点」「意識」「本人」等、「変化なし」が「強い」「面接」「利用」「アセスメント」「プラン」「本人」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図（図5）では、「上昇」「変化なし」での頻出単語として「強い」が挙げられた。

KWIC コンコーダンスにて「強い」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「本人、家族の持っている強さを引き出していきたい」「利用者や家族の強みに気づくことができた」との記載が見られた。また、「今回の研修で強さをより意識できるようになった」「研修を終え、利用者の強さに焦点をあてるよう意識するようになった」という研修の効果をあげる記載もあった。

3ヶ月後評価が「変化なし」に対して、KWIC コンコーダンスにて「強い」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「強さを見つけることが苦手だと思った」「強

質問⑥「利用者がどのような状況に置かれ、どのように感じ、考えているかを理解するための面接ができる」

自己評価の比較(表⑥-1)では、「上昇」92人(60.9%)、「下降」6人(3.8%)、「変化なし」50人(33.1%)、「評価未記入」3人(2.0%)であった。「上昇」は他の質問項目より減少し、逆に「下降」が複数名になるとともに「変化なし」の人数も増えている状況であった。

自由記述の頻出単語(表⑥-2、表⑥-3)では、「上昇」が「利用」「面接」「本人」「家族」「聞く」等、「変化なし」が「利用」「面接」「思う」「大切」「理解」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図(図6)では、「上昇」「変化なし」での頻出単語として「利用」「面接」が挙げられた。また「上昇」「下降」「変化なし」に共通している単語としては「本人」「立場」「理解」「気持ち」が挙げられた。

KWIC コンコーダンスにて「利用」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「利用者、家族それぞれの意思を確認しながら面接を行っていきたい」「利用者の言葉をそのまま繰り返し使用することにした」「家族関係、利用者を取り巻く環境を事前に把握し本人の気持ちを聞き取る」等の記載があった。また、「面接」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると「深い関心を持って面接を行うように心がけている」「本人の思いを確認しながら面接する」「利用者の立場になって面接するように心がけている」等の記載があった。

3ヶ月後評価が「変化なし」に対して、KWIC コンコーダンスにて「利用」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「面接技術を利用していききたい」「利用者の気持ちになって考える」「利用者の立場に立って本音が見えてくると思う」等の記載があった。

3ヶ月後評価が「下降」に対して、KWIC コンコーダンスにて「本人」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「本人の置かれている立場を受容していく」との記載があった。また、「理解」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「気持ちを伝えられない方にどうすれば理解できるかが個々によって違うため、利用者に応じて対応できた」との記載があった。

表⑥-1 質問⑥ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	92人	60.9%
下降	6人	3.8%
変化なし	50人	33.1%
未記入	3人	2.0%

表⑥-2 自由記述頻出単語（上昇）

頻出単語	出現回数
利用	30回
面接	23回
本人	16回
家族	14回
聞く	12回

表⑥-3 自由記述頻出単語（変化なし）

頻出単語	出現回数
利用	13回
面接	11回
思う	9回
大切	8回
理解	8回

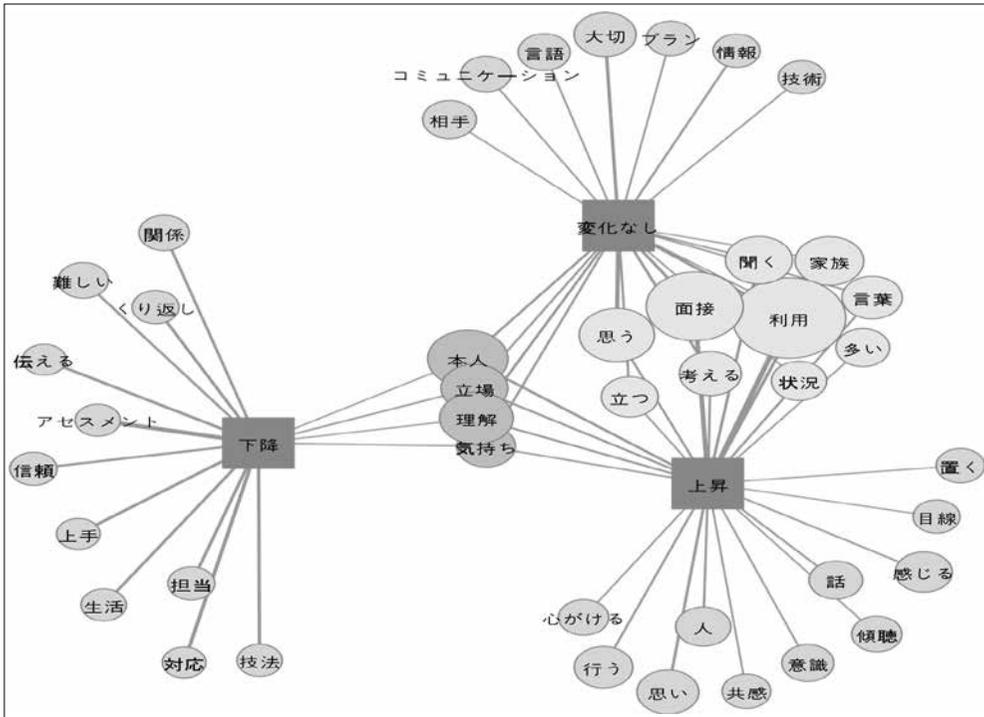


図6 質問6 共起ネットワーク図

質問⑦ 「利用者が決定できるように支援することができる」

自己評価の比較（表⑦-1）が「上昇」93人（61.6%）「下降」4人（2.6%）、「変化なし」51人（29.8%）、「評価未記入」3人（2.0%）であり、質問⑥とほぼ同じような結果となった。

自由記述の頻出単語（表⑦-2、表⑦-3）では、「上昇」が「利用」「決定」「家族」「支援」「思い」等、「変化なし」が「利用」「決定」「本人」「家族」「思う」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図（図7）では、「上昇」「下降」「変化なし」での頻出単語として「決定」が挙げられた。また、「上昇」「変化なし」での頻出単語としては、「利用」が挙げられた。

KWIC コンコーダンスにて「決定」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、

「利用者が参加し決定しやすいプランにする」「利用者の決定を意識する」「利用者、家族が決定できるように」等の記載があった。また、「認知症が進んでくると自己決定するのは難しい」「自分の訴えがはっきりしない方の自己決定は難しい」等決定の困難性への記載もあった。一方で、「自己決定できない人の思いも汲み取る」「決定できない認知症の方々の代弁機能を果たせるようにしたい」等の記載も見られた。「利用」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「利用者に決定できるように心がけている」「専門家の主観を押しつけることなく利用者の決定を意識する」「利用者の目線に立った支援が大事」等の記載があった。その一方で、「今まで利用者本位ではなく、どちらかと言えば家族の意向が大きすぎた」「利用者が遠慮している」と利用者が決定できる支援への課題を挙げる記載もあった。

3ヶ月後評価が「変化なし」「下降」に対して、KWIC コンコーダンスにて「決定」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「施設生活での自己決定は難しい」「意思の疎通ができる方に対してはできているが、認知症の方や寝たきりの方に対しては課題」等のように困難性を述べる記載もあった。一方で、「本人主体で決定できるように配慮しなければと思った」「決定できるよう支援していきたい」等のように今後の意向として捉える記載も見られた。

表⑦-1 質問⑦ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	93人	61.6%
下降	4人	2.6%
変化なし	51人	29.8%
未記入	3人	2.0%

表⑦-2 自由記述頻出単語 (上昇)

頻出単語	出現回数
利用	37回
決定	29回
家族	16回
支援	12回
思い	9回

表⑦-3 自由記述頻出単語 (変化なし)

頻出単語	出現回数
利用	15回
決定	15回
本人	14回
家族	7回
思う	7回

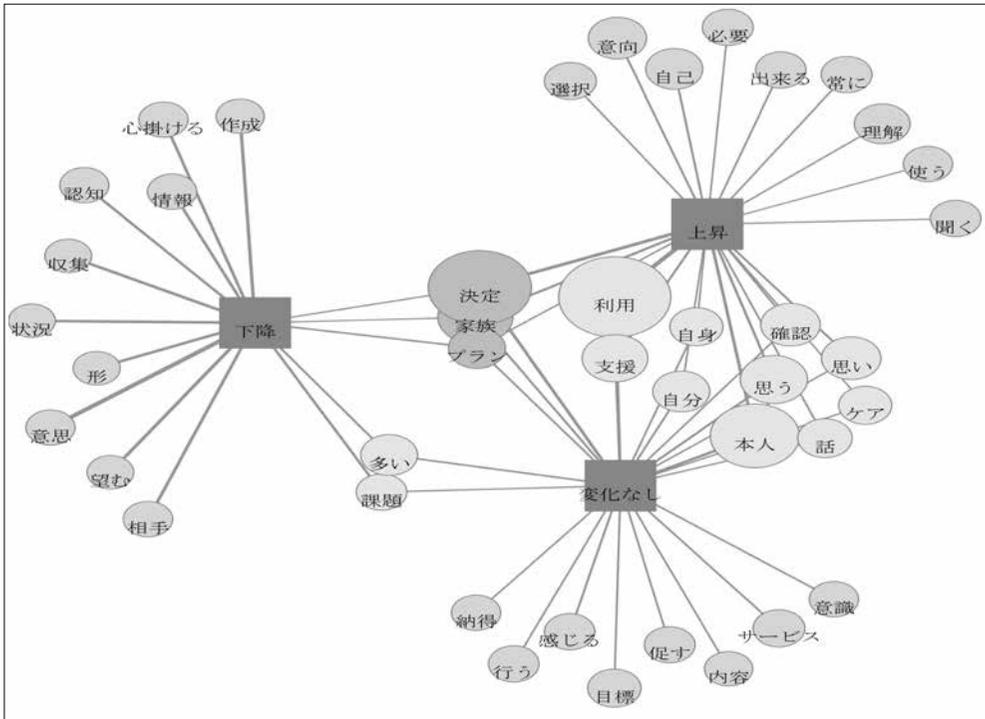


図7 質問⑦ 共起ネットワーク図

質問⑧ 「支援目標に向けて利用者と共同作業を行うことができる」

自己評価の比較(表⑧-1)では、「上昇」93人(61.6%)、「下降」2人(1.3%)、「変化なし」53人(35.1%)、「評価未記入」3人(2.0%)であり、質問⑥・⑦とほぼ同じような結果となった。

自由記述の頻出単語(表⑧-2、表⑧-3)では、「上昇」が「利用」「目標」「本人」「プラン」「支援」等、「変化なし」が「利用」「共同」「本人」「目標」「作業」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図(図8)では、「上昇」「下降」「変化なし」での頻出単語として「目標」が挙げられた。また、「上昇」の頻出であり、「変化なし」にも出てくる単語として「本人」が挙げられた。

KWIC コンコーダンスにて「目標」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「本人、家族と一緒に決められるようになった」「支援目標設定について共同作業を意識して行っている」「アセスメントにおいて支援目標を適切に位置づける」「ケアマネや家族だけの支援目標ではなく、あくまでも利用者主体」等の記載があった。また、「本人」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「目標の確認を利用者本人と行う」「本人に継続してもらうことも考えながら支援した」「チームアプローチできるよう本人を含めた支援に心がけた」等のように研修後の実践において意識したことの記載があった。一方で、「本人の気持ちとズレがある」「目標に向けて本人と一緒に考えて行く働きかけが弱いと感じている」と課題を挙げる記載もあった。

3ヶ月後評価が「変化なし」「下降」に対して、KWIC コンコーダンスにて「目標」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「利用者と話し合いを重ねて目標を決めていけている」「意向や目標をすり合わせて行うよう意識した」「利用者の意欲を引き出せるよう一緒に目標を考え努力していけるよう支援しなければならない」「目標に対しての話も勧めやすくなる時があった」等のように研修後の変化を挙げる記載もあった。

表⑧-1 質問⑧ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	93人	61.6%
下降	2人	1.3%
変化なし	53人	35.1%
未記入	3人	2.0%

表⑧-2 自由記述頻出単語 (上昇)

頻出単語	出現回数
利用	29回
目標	28回
本人	24回
プラン	14回
支援	13回

表⑧-3 自由記述頻出単語 (変化なし)

頻出単語	出現回数
利用	17回
共同	12回
本人	10回
目標	10回
作業	10回

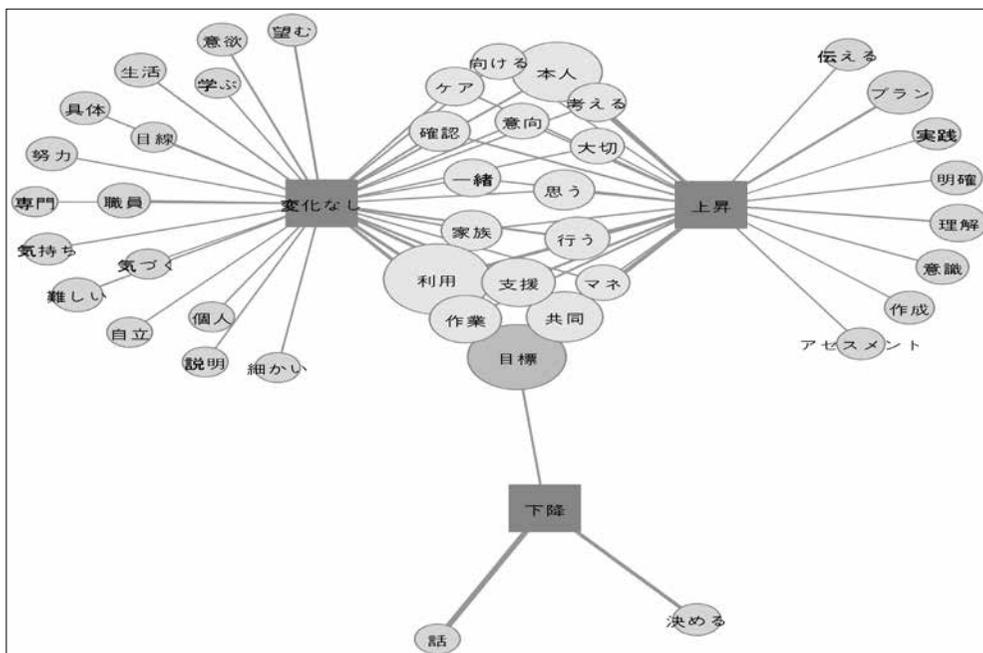


図8 質問⑧ 共起ネットワーク図

質問⑨ 「面接技術を、家族やインフォーマルな支援者、サービス事業者等のさまざまな関係者に対しても活用することができる」

自己評価の比較（表⑨-1）では、「上昇」108人（71.5%）、「下降」3人（2.0%）、「変化なし」37人（24.5%）、「評価未記入」3人（2.0%）であり、質問⑥・⑦・⑧と比較すると、「上昇」が増えて7割という状況だった。

自由記述の頻出単語（表⑨-2、表⑨-3）では、「上昇」が「インフォーマル」「家族」「サービス」「活用」「関係」等、「変化なし」が「家族」「面接」「大切」「インフォーマル」「サービス」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図（図9）では、「上昇」「下降」「変化なし」の3つにおいて「インフォーマル」「サービス」が頻出していた。

KWIC コンコーダンスにて「インフォーマル」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「インフォーマルなサービスを計画にもっと入れる」「家族やインフォーマル支援を活用する」「見えていないインフォーマルサービスを掘り起こす」「インフォーマルサービスの活用ができていないので頑張りたい」等の記載があった。このようにインフォーマルなサービスを活用していこうとする内容の記載が多く見られた。

表⑨-1 質問⑨ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	108人	71.5%
下降	3人	2.0%
変化なし	37人	24.5%
未記入	3人	2.0%

表⑨-2 自由記述頻出単語（上昇）

頻出単語	出現回数
インフォーマル	24回
家族	20回
サービス	16回
活用	13回
関係	13回

表⑨-3 自由記述頻出単語（変化なし）

頻出単語	出現回数
家族	10回
面接	7回
大切	7回
インフォーマル	6回
サービス	6回

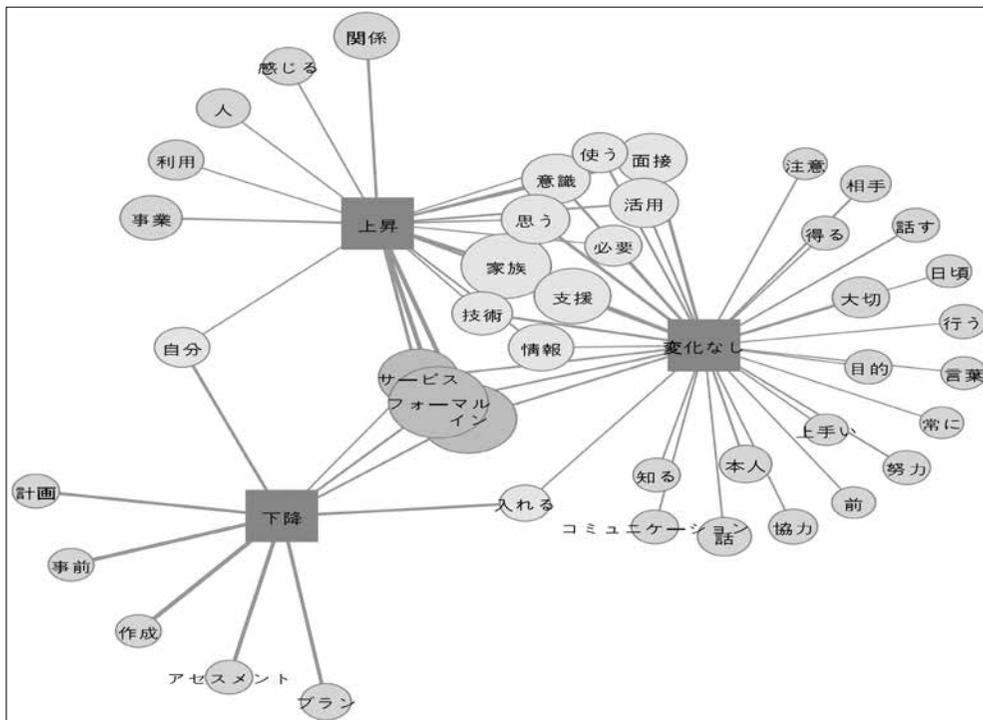


図9 質問⑨ 共起ネットワーク図

質問⑩「面接技術において自らの不足するスキルを再認識する」

自己評価の比較(表⑩-1)が「上昇」117人(77.5%)、「下降」0人(0%)、「変化なし」31人(20.5%)、「評価未記入」3人(2.0%)であった。面接技術について自らのスキルを再認識した人が、8割近くという結果であった。

自由記述の頻出単語(表⑩-2、表⑩-3)では、「上昇」が「自分」「面接」「思う」「技術」「不足」等、「変化なし」が「面接」「思う」「技術」「大切」「不足」等であった。

テキストマイニングの共起ネットワークで分析を行った図(図10)では、「上昇」での頻出であり「変化なし」でも見られる単語として「面接」「自分」が挙げられた。

KWIC コンコーダンスにて「面接」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「面接技術のスキルを磨いていきたい」「面接技術について勉強不足だと感じた」「面接技術が必要と感じた」等の記載があった。また、「自分」の単語を抽出し、その前後の文章を確認すると、「他のケアマネの意見を聞き自分が足りない部分があることを感じた」「他人の話を聞くと自分の足りない言葉が多くあった」等の研修をとおしての内省の記載が見られた。

表⑩-1 質問⑩ 自己評価の変化 n=151

	人数	割合
上昇	117人	77.5%
下降	0人	0%
変化なし	31人	20.5%
未記入	3人	2.0%

表⑩-2 自由記述頻出単語（上昇）

頻出単語	出現回数
自分	31回
面接	21回
思う	15回
技術	14回
不足	14回

表⑩-3 自由記述頻出単語（変化なし）

頻出単語	出現回数
面接	7回
思う	6回
技術	5回
大切	5回
不足	4回

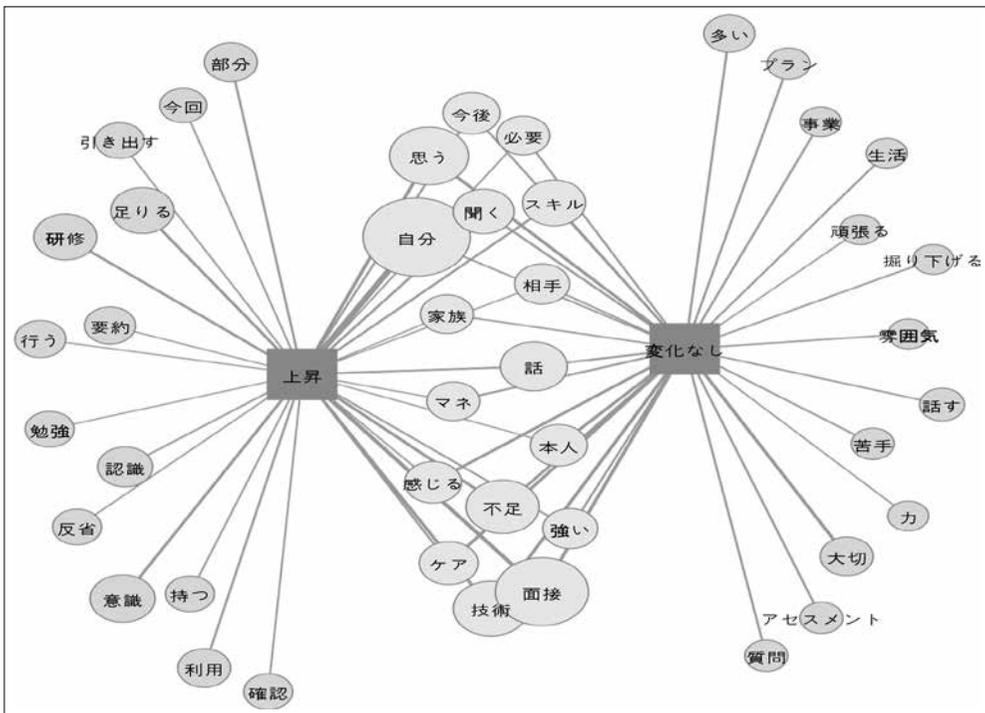


図10 質問⑩ 共起ネットワーク図

4 考察

研修修了3ヶ月後自己評価の結果をまとめると、以下の3点が考えられる。①3ヶ月後評価を行うことで研修内容と日々の実践を振り返る機会になっている。②3ヶ月後評

価が「上昇」していることが多いことから、研修が実践に変化を与えたと感じている。

③「変化なし」「下降」と評価した人も、研修内容と実践を比較して内省した評価に繋がっている。

①「3ヶ月後評価を行うことで研修内容と日々の実践を振り返る機会になっている」については、3ヶ月後評価を記載した際に研修で学んだことを思い出しながら、日々の実践に繋げて考えることが出来ていた。例えば「意識して面接するようになった」「その人に合った面接を行うよう意識している」「利用者の抱える問題について整理してから行うようにしている」「研修を終え、利用者の強さに焦点をあてるよう意識するようになった」などのように、研修で学んだことをその後の実践に活かそうとしている記載が多く見られた。また、「面接技術を活用する」「決定できない認知症の方々の代弁機能を果たせるようにしたい」「しっかり準備して面接を行っていこうと思う」等のように、研修で学んだことを実践の中で今後も取り組んでいこうという姿勢にも繋がっているのではないかと考えられる。

ただ研修内容を思い出すだけでなく、その後に行っている日々の実践と結びつけて自らが意識していること、またはその課題等を明らかにしている記載が多く見られた。これらのことから、3ヶ月後自己評価を行うことで研修内容と日々の実践を振り返る機会になっていると言うことができる。

②「3ヶ月後評価が『上昇』していることが多いことから、研修が実践に変化を与えたと感じている」については、質問項目10個全ての項目で6割以上の人の自己評価が上昇していた。受講前と比較すると、研修で行ったことを踏まえて実践した結果、できるようになったと感じている人が多いと言える。例えば「面接する時の意識が変化した」「今回の研修で強さをより意識できるようになった」「利用者の言葉をそのまま繰り返し使用することとした」「本人、家族と一緒に決められるようになった」等のように、研修で学んだことを実践で行ってみての変化を挙げる記載も見られた。

このことから研修後日々の実践に変化を感じて、自己評価も上昇したのではないかと考えられる。とは言っても、この結果はあくまでも自己評価であるため、評価表を提出し他者が見ることになると数値を「上昇」として記載する傾向があることは否めない。しかし、数値だけでなく自由記述を読んでいくと、研修で学んだことをその後の実践で意識して行おうとする姿勢は感じ取れることができた。

③「変化なし」「下降」と評価した人も、研修内容と実践を比較して内省した評価に繋がっている」については、「変化なし」「下降」と評価した人が出来ていない現状を否定的に捉えるのではなく、今後の課題としている記載が多く見られた。例えば「強さを見つけることが苦手だと思った」「強さに着目する大切さを学んだ」「決定できるよう支援していきたい」「利用者の意欲を引き出せるよう一緒に目標を考え努力していけるよう支援しなければならない」等、現状では自らが不足していると感じているが、今後何を行えばいいかを明らかにしている記載もあった。これらのことから自己評価が「変化なし」「下降」であっても、自らの実践を振り返り、課題を明確にして今後活かそう

とする姿勢が感じられたと言える。

今回の研究は、自己評価での結果による分析のため、あくまでも受講者の主観による記載となり、客観的な評価とは言えない。今回の自己評価の結果では、受講前後の自己評価が「上昇」している人が多かった。しかしだからと言って、「上昇」と回答した全ての受講者が、研修で学んだことを活かして質が向上したとは言い切れない。逆に受講前後の評価が「下降」している場合でも、介護支援専門員研修ガイドラインでは「理解度が増し、学ぶべき範囲が見えた事で自己評価が下がる場合がある」⁴⁾と指摘している。そのため、「できる」「できない」の数値による評価だけでは、研修が実践に繋がっているかの評価は出来ない。つまり、自己評価の場合、数値だけでなく、自由記述も含めた評価を行っていくことが欠かせないと言えるだろう。また、当然のことながら自己評価だけでなく、客観的な評価も併せて行うことが必要である。この客観的評価について、2016年度から始まった介護支援専門員更新研修では、所属事業所の上司が行うこととしている。研修に参加していない職場の上司が客観的評価を行い、研修の効果を検証することには限界があるのではないかと感じている。

2016年度から全ての法定研修で自己評価を含めた研修評価を行うことが求められている。A県の場合、研修受講者が数百名を超えることもあり、研修の全ての科目において全ての受講生が自己評価を行うのであれば、それをどのようにして分析していくかについては課題が残されている。本研究のように自己評価において数値での評価だけではなく、自由記述も含めた分析を行うこと。そして、研修内容を踏まえた他者評価をどのように行うのかが、今後の課題ではないかと考えている。

文 献

-
- 1) 加瀬裕子「介護保険におけるケアマネジメントの現状と倫理的課題」
ケアマネジメント学(2)7-14(2003)
 - 2) 榎木博之「介護保険制度におけるケアマネジメントに関する課題」
ケアマネジメント学(5)116-121(2006)
 - 3) 介護支援専門員(ケアマネジャー)の資質向上と今後のあり方に関する検討会「介護支援専門員(ケアマネジャー)の資質向上と今後のあり方に関する検討会における議論の中間的な整理」(2013)
 - 4) 日本介護支援専門員協会 介護支援専門員研修ガイドライン(2013)

(受付日 2017年10月5日)

(受理日 2017年12月6日)

Abstract

This paper aimed to analyze self-assessment questionnaires conducted three months after training sessions for renewal of effective period of long term care support specialist certification to confirm whether the training had any effect on actual practices and to measure the degree of effects. The research subjects were 151 practitioners who underwent training sessions implemented during FY2015 in A Prefecture. The self-assessment on the subject, “Social Case Work (lecture/seminar)” was conducted three months after the training. The self-assessment values in pre- and post-training (three months later) were compared, and the changes in the values between these periods were examined. In addition, text mining method was used to extract frequently appearing words in the texts written in the free description space in the assessment form and analyzed them using a co-occurrence network.

Based on the analysis of the self-assessment conducted three months after the completion of training, the following three points are suggested: (1) the self-assessment provided an opportunity for the participants to reflect on the contents of training and their day-to-day practices; (2) the training had an effect on their actual practices; (3) the self-assessment was associated with the evaluation through participants’ self-reflection of the training contents and actual practices. These results suggest that the self-assessment conducted three months after the training for renewal of effective period of long term care support specialist certification showed the effects of the training on the participants’ actual practices in the post-training period.

Key words : long term care support specialist
training for renewal of effective period
self-assessment
the effects of the training, text mining